

「狼」という星

山田尚子

一

中島敦は、明治四十二年（一九〇九）五月五日に生まれた。今から百年前の大正六年（一九一七）には満八歳。成城学園創立百周年、そして『成城文藝』百周年記念号にかこつけて、中島敦の用いる漢語について書いてみようと思いついた。いや、より正確には、思い立ってしまったと思うべきか。

中島敦の祖父の中島撫山（「撫山」は号、本名慶太郎）は幕末から明治にかけての漢学者で、父の田人は中学校の漢文の教員、伯父の端蔵（号は「斗南」）、疎之助らも漢学

者であった。その作風もさることながら、こうした環境からしても、中島敦の文学が一面として漢学の教養を素地としていたことは疑いようがなく、そしてそれは周知の事柄に属する。

中島敦の漢詩は二十五篇（一篇に数首が含まれる場合があり、全部で三十七首）が残る。まずは中島敦の漢詩のなかから、もっともよく知られる一篇を掲げてみよう。

攻文二十年、文を攻むること二十年、

自嗤疎世事。自ら嗤ふ、世事に疎きことを。

夜偶倦繙書、夜、偶々書を読み、

起仰天狼熾。起ちて仰げば天狼熾なり。

文学を学んで二十年、世間知らずを自らわらう。ある

夜、ふと書物を読むのに疲れ、からだを起こして空を見上げると、天狼の星が熾烈な光を放っている、というもの。

「天狼」はシリウス（おおいぬ座 α 星）。この恒星は、おおいぬの鼻先の部分に当たり、冬の大三角形、冬のダイヤモンドを構成する。恒星の中では（太陽を除けば）地球から最も明るく見える星で、よく晴れた冬の夜、南の空を見上げれば、やや青みがかつた白さで強く輝くその姿を容易に見つけることができる。中島敦の漢詩のうち、四篇にこの星が詠み込まれている。もう一例。

狼星方爛々、 狼星は方に爛々たり、

参宿燦斜懸。 参宿は燦として斜めに懸かれり。

凍夜疎林上、 凍夜疎林の上、

悠悠世外天。 悠悠たり、世外の天。

シリウスが今まさしく爛々と輝き、そのそばにはオリオンの三ツ星が、燦然ときらめきながら空に斜めにかかっている。凍てつくような寒い夜、枯れ枝ばかりでまばらな林の上には、このわずらわしい俗世の外にある天が、じつに悠然と広がっている、というもの。

この詩の「狼星」、「参宿」にはそれぞれ「シリウス」「オリオン」のルビが付される。このうち「狼星」は先の

「天狼」に同じ。単に「狼」とも呼ばれる。せっかくなので、この星の詩をもう一例だけ。

平生懶拙瞻星悦、 平生懶拙にして星を瞻て悦ぶ、

半夜仰霄忘俗説。 半夜霄を仰ぎて俗説を忘る。

銀漢斜奔白渺茫、 銀漢斜めに奔り、白きこと渺茫たり、

銀漢斜めに奔り、白きこと渺茫たり、

天狼欲亘稀明滅。 天狼亘えんと欲して稀に明滅す。

日ごろから無精で人づきあいの下手な私の楽しみは星を見ること。夜中になって天を見上げれば、世間の人々が嬉々として語るくだらない話など忘れてしまふ。空には天の川が斜めに流れ、白色の星々がぼんやりと拡がって果てしない。その中で天狼の星が、今しも凍るかのようにくつきりと輝き、時折り思い出したように明滅する、というものの。

中国の星座は、遅くとも戦国時代（紀元前四世紀）に生まれ、後漢・三国時代（三世紀）にはほとんど出揃っていたといわれる（大崎正次『中国の星座の歴史』）。本稿は、「狼」と名づけられた星をめぐる随録である。

中島敦は、昭和十七年（一九四二）十二月四日、持病の喘息のために満三十三歳で没した。『李陵』は、中島敦の没後、妻のたかがその草稿を深田久彌に託し、翌昭和十八年、『文學界』七月号に掲載された。草稿にはまだ題がなく、深田久彌によって「李陵」と名付けられた。

『李陵』に描かれる李陵の事績は、『漢書』『李広蘇建伝』に載る李陵伝に基づくが、次の場面は李陵伝に該当箇所を見出すことができない。

山峡の疎林の外れに兵車を並べて囲ひ、その中に帷幕を連ねた陣営である。夜になると、気温が急に下がった。士卒は乏しい木々を折取つて焚いては暖をとつた。十日もゐる中に月は無くなった。空気の乾いてゐるせみか、ひどく星が美しい。黒々とした山影とすれぐれに、夜毎、狼星が青白い光芒を斜めに曳いて輝いてゐた。十数日事無く過した後、明日は愈々此処を立退いて、指定された進路を東南へ向つて取らうと決したその晩のことである。一人の歩哨が見るとも無く此

の爛々たる狼星を見上げてみると、突然、その星の直ぐ下の所に頗る大きな赤黄色い星が現れた。オヤと思つてゐる中に、その見なれぬ大きな星が赤く太い尾を引いて動いた。と続いて、二つ三つ四つ五つ、同じやうな光がその周囲に現れて、動いた。思はず歩哨が声を立てようとした時、其等の遠くの灯はフツと一時に消えた。まるで今見た事が夢だつたかの様に。

浚稽山に駐屯した李陵軍の前に匈奴の大軍が姿を現す、その前夜。李陵軍の歩哨は、連夜、光芒（尾をひいたように見える光の筋）をひきながら輝き続けていた狼星のすぐ下に、赤黄色の巨大な星が尾をひいて動くのを目にする。ここで赤黄色の星のように見えたそれこそ、まさしく匈奴軍に違いない。果たせるかな、この後、歩哨の報告を聞いた李陵は、全軍に戦闘準備を命じる。

村田秀明は、この場面が元末明初に生きた高啓（号は「青邱」）の「將軍行」の一節「狼星掃天芒角斜、大旗獵々吹風沙」に基づいていること、具体的には、『統国訳漢文大成』（国民文庫刊行会）の「高青邱詩集」（久保天随訳）を用いて作られたものであることを明らかにした（『中島敦『李陵』の創造』）。

「將軍行」は、匈奴討伐へと出征する將軍の有り様を描いた楽府である。「楽府」には一定の体裁がなく、すんなり理解するのが難しい。決まった旋律に合わせて歌われることを前提として作られる詩、といえば、ひとまずはいいだろうか。久保天随は、問題の「將軍行」の一節を「狼星、天を掃うて、芒角斜なり、大旗、獵々として風沙を吹く」と訓読し、「今しも、天狼の星、斜に長い尾を引いて、その光芒、大空を掃ふばかり、変乱の兆たることは、言ふまでもなく、大旗は颯々として、風沙がこれに吹きつける」と解釈する。また「字解」として「狼星」については「即ち天狼、史記天官書に「東に大星あり、狼といふ。狼角、色を変ずれば盜賊多し」とある」と注し、さらに「芒角」について「その光芒をいふ」と注する。

『李陵』のこの場面は、この中の「狼星が青白い光芒を斜めに曳いて輝いてゐた」という一節が「狼星掃天芒角斜」に基づくばかりでなく、この場面全体が「狼星掃天芒角斜、大旗獵々吹風沙」にのっとって、しかも久保天随の解釈に従って、作られていると思われる。『李陵』の狼星は、「狼星掃天芒角斜」の「狼星」に同じく、匈奴が襲い来る、その前兆として描き出されたものだろう。

三

古代中国の人々は、帝の周囲がさまざまな官職の者たちによって固められ、世の中が治められていく、そのさまを星に見立てて天に配置した。人ばかりではない。天には道具や建造物、動物などを象徴する星座もある。天の世界は、さながら人の世界の写し絵であった。そして、そうした天の世界の現象こそ、人の世界の予兆であり得ると考えられたのである。

『史記』の「天官書」は、中国の天文に関するまとめた記述としては最も古い。「天官書」では、天帝を取り巻く官職を中・東・南・西・北の五官に分けて説明する。狼星は西官に属し、次のように説明される。

其東有大星曰狼。狼角変色、多盜賊。下有四星曰弧、直狼。

其の東に大星有りて狼と曰ふ。狼角ありて変色すれば、盜賊多し。下に四星有りて弧と曰ひ、狼に直たれり。

狼星に光芒があり、しかも色を変じた場合には盜賊が増

える。そして、狼星の下に位置する四星を弧星といい、狼星に向かつてまっすぐに対峙している、というわけである。

また、晋の歴史を記した『晋書』の「天文志」には、「狼は野將たり、侵掠を主る」とあり、狼星とは山賊の首領であり、この星の状態によって、世に侵略や掠奪が起るかどうかが、その兆候を窺うことができるという。弧星については「弧の九星、狼の東南に在り、天の弓なり」といい、「盜賊に備ふるを主る、常に狼に向ふ」とあって、山賊の首領たる狼星を封じる役割を課せられているという。そして、「弧矢動移して常の如くあらざれば、盜賊多く、胡兵大いに起つ」とあって、弧星が移動して普段と違った位置にあるときには、盜賊が増え、北方の異民族が兵を揚げるといふ。

さらに、先に挙げた『史記』「天官書」の記事をめくって、唐の張守節の注（『史記正義』）では、この星が黄白で明るれば吉兆だが、赤くて光芒をひく場合には兵乱が起ると説明している。中国の天文学における狼星は、兵乱や侵略を象徴し、それらを防ぐために射かけられ牽制されるべき存在なのであった。

四

『楚辭』「九歌」に「天狼」が見える。『楚辭』は、中国戦国時代に楚の国で謡われた歌謡を集めた作品群を、そのように呼ぶ。このうち「九歌」は、楚の南方に伝わっていた神楽歌を、屈原が新たに作り直したものとされ、多くは「東皇太一」（＝最上神）や「雲中君」（＝雲の神）、「湘君」（＝湘水の神）などの個々の神々を題としている。

「天狼」が見えるのは「九歌」のうちの「東君」。東君は日の神を意味する。次に抜粹して掲げよう。

青雲衣兮白霓裳、
青雲の衣白霓の裳、

挙長矢兮射天狼。
長矢を挙げて天狼を射る。

操余弧兮反淪降、
余が弧を操つて反つて淪降し、

援北斗兮酌桂漿。
北斗を援いて桂漿を酌む。

撰余轡兮高馳翔、
余が轡を撰つて高く馳翔すれば、

杳冥々兮以東行。
杳かに冥々として以て東に行く。

『楚辭』の解釈はことさらに難しい。従って、未だ解消されない疑問は残るものの、この部分は、太陽が東から昇って西に沈み、翌日また東から昇るために東へと移動す

る、その間の天の有り様を、日の神の行動として描いたものと考えることができる。「青雲」と「白霓」は、五行の考え方によつて東と西を表す。日の神は、東から西へと移動しながら、長矢を以て狼星を射る。狼星を見事に射抜いた後、自分の弓を持つて西の地の下へと沈んでゆき、北斗七星のヒシヤクで祝杯をあげ、やがて地下を東へと進む。

『漢籍国字解全書』（早稲田大学出版部）の「楚辞」は、浅見綱齋講述の『楚辞師説』を採用している。「師説」とは綱齋の説をその門弟が筆記したことによるといふ。掲げた箇所は以下のように説明されている。

これは、日神の来りて総ての働きを云ふ、日は東から出て西へ入る、東は青し、西は白きゆゑ、東西の色を象る、天狼と云ふ星を射るは、日の霊で、邪を去ること、淪降は、西の山へ入ること、夜に入つては、北斗の星を連れるぞ、余と云ふは、皆あなたのことを云ふ、手綱を取りて、馳せて東へ回はりて、「によつ」と又、東へ出ること。

「によつ」が、なんとも面白い。『楚辞師説』は、「ゆらりく」とか「ばたく」とか「どかく」とかいうような擬態語・擬音語が多く、いかにも講義の筆録らしい様子を

している。

話が横道にそれたが、『楚辞』の最も古い注釈書は、後漢の王逸の『楚辞章句』である。「拳長矢兮射天狼」について王逸は、「天狼は星の名なり。以て貪残に喩ふ。日は王者たり。王者は命を受け、必ず貪残を誅す。故に長矢を挙げて天狼を射ると曰ふ。君は当に悪を誅すべきことを言ふなり」といふ。狼星は、貪欲さ残忍さを表すものであり、王によつて射抜かれ、誅殺されるべき存在であった。

なお、『国訳漢文大成』の「楚辞」の訳注は釈清譚による。清譚は、王逸の注、南宋の朱熹の注（『楚辞集注』）、清の林雲銘の注（『楚辞燈』）の三つの注を主とし、それらを折衷して解釈している。ちなみに「天狼」の句については「天狼星は東井の南に在り、野将と為す、侵略を主とす。日は王者なり、王者命を受けて必ず貪残を誅す、長矢は之を誅する所以なり」と解する。これは、おおよそのところ、王逸注と、『晋書』「天文志」を引用する朱熹の注とを合わせ用いて作られたものである。

『楚辞』という文学の形は、やがて賦の文体へと引き継がれていく。語彙としての狼星もまた賦に用いられるようになるのには、さもありなんといい思いがする。賦は、漢代に全盛を迎えた、不定形の韻文である。当代一流の文人によって、手間と時間をたっぷりかけて彫琢され、しばしば諷諫のために帝に献上される。

前漢の揚雄の「河東賦」は、成帝が山西省の汾陰にある后土祠（地の神をまつる社）に行幸して祭祀を行い、各地を巡幸して帰ったことを詠んだ作品である。

於是命群臣、齐法服、整灵輿、乃撫翠鳳之駕、六先景之乘、掉犇星之流旃、覆天狼之威弧。

是に於て群臣に命じ、法服を齊へ、靈輿を整へ、乃ち翠鳳の駕を撫し、先景の乗を六にし、犇星の流旃を掉かし、天狼の威弧を覆る。

出立する帝の様子を描いた場面。「翠鳳之駕」は、鳳凰をかたどり、翠の羽で飾った帝の車。「先景」は馬が速く走ること。影よりも早いことを表す。帝の乗る翠鳳の車が

駿馬六頭に引かれて天翔け、流星の旗をゆりうごかし、天狼の星に向かつて弧星の弓をひきしぼる。実際の帝の行幸を、天上を移動するものとして表現したものだろう。

後漢の張衡は、天文暦算の術に通じ、揚雄の賦を好んだ。その「思玄賦」は、宦官の讒言によって国政から退けられた際に「吉凶は互いにその因果となり、奥深いところにかくれた真理は明らかにし難い」と考え、自らの思いを述べて作ったものだという。

「思玄賦」に、自身が天上に昇って天帝に会い、その後しばらく天外を駆け巡る場面がある。「天狼」はこの場面に見える。

命王良掌策駟兮、踰高閣之将々。建罔車之幕々兮、狷青林之茫茫。彎威弧之拔刺兮、射罽冢之封狼。觀壁壘於北落兮、伐河鼓之磅礪。

王良に命じて駟を策つことを掌らしめ、高閣の将将たるを踰ゆ。罔車の幕幕たるを建て、青林の茫茫たるに狷る。威弧の抜刺たるを彎き、罽冢の封狼たるを射る。壁壘を北落に觀、河鼓の磅礪たるを伐つ。

「王良」「駟」「高閣」「罔車」「青林」「壁壘」「北落」「河

鼓」はいずれも星の名前。「王良」は戦国時代の名御者だが、天に昇って星になったという。「駟」は天駟星、天帝の天馬。「罔車」は畢星、兎捕りの網の形の星座。月が畢に近づくと雨が降るとされ、「雨師（あめふりほし）」と呼ばれる。「威弧」は弧星。「封狼」は狼星のこと。「封」は「大」を意味する。「青林」は天苑星、天帝の御苑。「壁壘」は、天帝を守る羽林將軍の西にあるとりでで、そのかたわらには「北落」という大きな星がある。

やや煩雑だが、この箇所は次のように解釈できよう。王良に命じて天馬を操らせ、高くそびえる楼閣の星を越える。畢星の網を盛大に張り、広大な天苑で狩りをする。弧星を強くひきしぼり、蟠冢山の精である狼星を射抜く。壁壘の星を北落星のかたわらに見ながら、音を立てて流れる河の鼓をたたく。

こうしてみると、辞賦に見える狼星は、弧星に射られるべき存在であることは間違いないけれども、狼星を射るといふその行為は、作品の壮大さや、そこに描かれる王や主人公の威風堂々たる有り様を表すために用いられているように思われる。

なお、「思玄賦」は『文選』に載るほか、朱熹の『楚辞

後語』に収められていて、『国訳漢文大成』の「楚辞」には、「国訳楚辞」とともに「国訳楚辞後語」が収められている。

六

李白の詩の狼星は、現実的な対象を意味する。

白刃灑赤血、流沙為之丹。 白刃 赤血を灑ぎ、流沙

之れが為に丹し。

名将古誰是、疲兵良可嘆。 名将 古へ誰か是れなる、

疲兵 良に嘆くべし。

何時天狼滅、父子得間安。 何れの時にか天狼滅し、

父子 間安を得ん。

「幽州胡馬客歌」という楽府の末尾の六句である。匈奴によつて国土が侵され、中国の人々の血が白刃にそそがれ、流沙の砂漠はそのためにあかく染まってしまった。昔の名将ならこうはならない、疲れた兵というのは何とも嘆かわしい。一体いつになったら匈奴を滅ぼし、人々が徴兵にあえぎ苦しむことがなくなるだろうか、という。

「幽州」は現在の北京周辺。「幽州胡馬客」は、当時、范

陽節度使として幽州を治めていた安祿山を指す。この詩が作られたのは、天宝十四載（七五五）十一月に安祿山が范陽で蜂起する、その数年前のこと。この詩の中で李白は、安祿山率いる軍勢は弓などの武器の腕前は素晴らしいが、匈奴との戦いとなると一向に役に立たないと嘆いている。ここでの「天狼」は、匈奴を指す。

いまひとつ例をあげよう。

十月到幽州、戈鋌若羅星。

十月 幽州に到り、戈鋌星を羅ぬるが若し。

君王棄北海、掃地借長鯨。

君王 北海を棄て、地を掃うて長鯨に借す。

呼吸走百川、燕然可摧傾。

呼吸して百川を走らせ、燕然 摧傾すべし。

心知不得語、却欲棲蓬瀛。

心知 語るを得ず、却つて蓬瀛に棲まんと欲す。

彎弧懼天狼、挾矢不敢張。

弧を彎きて天狼を懼れ、矢を挟んで敢て張らず。

「経乱離後天恩流夜郎憶旧遊書懷贈江夏韋太守良宰（乱離を経たる後 天恩により夜郎に流され旧遊を憶ひて懷を書し江夏韋太守良宰に贈る）」と題されたこの五言詩は、

一六六句から成る長篇である。安祿山の乱で永王軍の参謀となつた李白は、即位した肅宗が永王軍を叛乱軍と見なすと、叛乱軍の一員として捕えられ、投獄された。死刑になる可能性もあったが、結局、夜郎に流罪と決まつた。夜郎は現在の貴州省桐梓県のあたり。唐の版図ぎりぎりの最果ての地であつた。この詩は、そのときの李白が、かつてともに遊んだ江夏の太守韋某氏に贈つて感懷を述べたもの。掲出したのは、安祿山の乱の勃発以前に幽州で安祿山軍を見かけたときのその模様と自らの心情を、回想しながら描いた箇所にあたる。

十月に幽州に着いてみると、たくさん兵士たちが星をつらねたように戈矛などの武器を手している。それは帝が北方の土地を見捨て、その一帯を巨大な鯨のような安祿山軍にまかせたからである。巨大な鯨が呼吸をすれば百川でその水勢が激しくなり、暴れば遙か北方の燕然山すら傾き崩れてしまうだろう。あるとき自分は安祿山が危険だと知つてはいたが、それを口に出して言うことはできず、かえつて蓬萊や瀛州のごとき仙境に住みたいと思つた。弓を引くものの天狼のごとき安祿山を射る勇氣はなく、矢をつがえてもひきしぼることができなかった、とい

う。

ここでは安祿山軍が「天狼」と呼ばれる。李白が「天狼」と表現するのは、北方から侵略を繰り返す匈奴や、叛乱を起こした安祿山など、具体的な対象、それも唐という国を脅かすものであることがわかる。そして「彎弧懼天狼」という表現からして、李白の「天狼」もまた、射られるべきものであった。

こうした李白の「天狼」を、後代の高啓の場合と比較してみると、高啓の「天狼」は、具体的な対象というよりむしろ、兆候としての意味合いが強いように思われる。中島敦『李陵』の浚稽山の場面の元となった「將軍行」の「狼星掃天芒角斜」の「狼星」は、匈奴襲来の前兆であった。

ほかにも例えば、友人王彝が高啓が贈った「嬌雌子歌」という作品では（「嬌雌子」は王彝の号）、元末の混乱の前兆が「天狼下地 舐血流渾々、鹿走秦中原、蛇鬪鄭国門。

（天狼地に下りて血を舐めて流れ渾々たり、鹿は走る秦の中原、蛇は鬪ふ鄭の国門。）と表現される。「鹿走秦中原」は、秦の始皇帝の死後、その地が乱れたことを言い、同時にそれは、帝位が篡奪の対象になったことを暗示している。「鹿」は、しばしば帝位や政権を表す語として用いら

れる。「蛇鬪鄭国門」は、春秋時代の鄭国の南門で内蛇と外蛇とが鬪ったというできごとを指す。外蛇の勝利は、鄭子嬰が殺され、厲公が入国して再び鄭国の君主となる前兆であった。

「天狼下地」は、秦の鹿や鄭の蛇と同じく、天狼が地に流れ下ることが世の変化・混乱の前兆となることを示している。「舐血流渾々」は、その星が降ると同時に赤色になることを暗に示しているのだろうか。高啓には他にも「天狼夜流血（天狼夜血を流す）」という表現があり（「下將軍墓」、高啓の中で、夜空の狼星が赤く輝きつつ彗星のように尾を引いて流れるイメージがあったのかもしれない）と思う。

七

稿者は、中島敦の漢詩の狼星が、辞賦や詩などの漢籍に見える狼星と同様の造型を以て用いられていることを主張したいわけではない。むしろ、調べれば調べるほど、考えれば考えるほど、両者の違いが鮮明になるように思われない。

中島敦の漢詩の中で、狼星は、世外の天に爛々と輝いている。その星を人が「狼」と呼ぼうと「シリウス」と呼ぼうと、ましてや侵略や掠奪、兵乱や叛乱の前兆を示す星だとか、射落とさねばならない存在だとか、どんなふうにも星を見なそうと、そのような人の見方とは何の関わりもなさそうである。その意味で、中島敦の漢詩の狼星と『李陵』の狼星との関係がどうなのか、そこのも問題のように思われる。『李陵』の狼星は、高啓の樂府の「狼星」を元としてはいるけれども、その造型はまったく同じだろうか。

『名人伝』は、中島敦が没した昭和十七年十二月、三笠書房の『文庫』十二月号に発表された。作品の終盤近く、九年にわたる弓の修行を終えた紀昌が、山を降りて帰ってくる。邯鄲の都に帰った彼は、木偶の如く愚者の如き容貌を持ち、一向に弓に触れようとしなかった。そんな弓を執らざる弓の名人について、人々の間に様々な噂が伝わる。噂の一つに次のようなものがあつた。

彼の家の近くに住む一商人は或夜紀昌の家の上空で、雲に乗つた紀昌が珍しくも弓を手にして、古の名人・羿と養由基の二人を相手に腕比べをしてゐるのを確か

に見たと言ひ出した。その時三名人の放つた矢はそれ／＼夜空に青白い光芒を曳きつつ参宿と天狼星との間に消去つたと。

弓の名人が放つたはずの矢が、射抜かれるべき星であるはずの天狼星を射抜かずに、青白い光芒をひきつつ消え去ってしまう。この事態は、一体どういうことだろう。何か暗示していることがありはしないか。穿ち過ぎかと思いつつ、ついついそんな思いに駆られてしまう。

八

最後に、明治から大正にかけての漢籍の叢書の刊行について少しだけ触れておきたい。

本稿では、『楚辭』のほか、李白、高啓の詩について、正統の『国訳漢文大成』を参照した。『国訳漢文大成』は、大正九年（一九二二）から大正十五年にかけて、『統国訳漢文大成』は昭和三年（一九二八）から昭和五年にかけて、国民文庫刊行会から出版された。正篇四十冊、続篇四十八冊から成る漢文翻訳の叢書である。

この叢書以前、富山房の『漢文大系』（二十二冊）が、

明治四十二年（一九〇九）から大正五年にかけて、早稲田大学出版部の『漢籍国字解全書』（五十七冊）が、明治四十二年から大正六年にかけて、刊行されている。今から百年前の大正六年の前後、漢籍の叢書の出版は、一つのブームであった（杉村武『近代日本大出版事業史』）。百周年にかこつけて、とりとめのない考察をめぐらせた。

主要参考文献

- ・杉村武『近代日本大出版事業史』（出版ニュース社、一九六七年）。
 - ・佐々木充『中島敦の文学』（桜楓社、一九七三年）。
 - ・村田秀明「中島敦の漢詩研究」（『方位』第二号、一九八一年四月）。
 - ・村田秀明「中島敦の漢詩の成立」（『国語国文学研究』第十七号、一九八二年三月）。
 - ・大崎正次『中国の星座の歴史』（雄山閣出版、一九八七年）。
 - ・村田秀明『中島敦『李陵』の創造——創作関係資料の研究——』（明治書院、一九九九年）。
- なお、中島敦の作品の本文はすべて『中島敦全集』（筑摩書房、一九七六～七八年）によった。ただし、漢字の表記は通行の字体に改めた。漢詩については訓読文を付した。